

道祖神のはなし

上 原

健

今年は、どの地方でも暖冬のように、私の住む松本地方でも昨年十二月から一月まで、一滴の雨や雪も降らない日が四十数日続いて数十年ぶりとかの記録を報じていた。信州の冬と云えば、雪深い風景を想像されるかも知れないが、こと松本地方は、表日本の冬と同じと見ても、まず間違いはない。ただ高い標高を持っているため、気温の較差は都市として日本最高である。冬は氷点下十四、五度にまで下がる。信州は南北に長い県である。北半分と南半分では冬の気候は大きな違いを見せている。松本から北へ向って国鉄大系線の電車にゆられ四、五十分もすると左手のアルプスが急に近付き、雪、又雪の別世界がひらける。この、わずかに数十キロの距離が気候の違いを決めている。そして、この電車の道すじは、安曇野、米所である。やがて枯野であった所から黒い土が盛り上がり、薄緑の命が芽吹き、アルプスの峰々と、そこから流れ出る雪どけ水にはぐ

くまれ生長し、黄金色の波が秋風に流れて一面に広がる頃には又、山は雪の便りが聞かれる。この平野安曇野には道祖神がいたる所に祀られている。

「道祖神」という言葉は、関西の皆さんには余り馴染みのないものだと思う。「塞の神」と聞けば、ハハンと思われるであろう。この道祖神については、最近の田舎ブームとでも云おうか、そんな風潮にのって随分雑誌などを賑わしているが、又地方の研究家達も、より詳しく、道祖神とは何ぞや……と云う問題に取り組んでいる。筆者は、普段、道端で目にすることの出来るこれらの神々について、浅い視野ではあったが、調査して集めたものをとつてあるが、此度研究会よりの原稿依頼を受けて、つたない筆を走らせている訳であるが、卒業してから今日まで、決して満足に資料を分析した訳でも、研究した訳でもないので、何ともお恥ずかしい次第である。

大塚民俗学会編の「日本民俗事典」によると、道祖

神は、人間が集落を成して社会生活を営んだ原初の段

①

階から自分たち仲間の生活の安全を守るべく、そのム

ラに邪霊悪鬼の類が立ち入らぬよう、さ・え・ぎ・り、は・ね
か・え・すための呪物を境域に置くことがあった……云々

とある。ここに道祖神の性格の一面が現われている。

つまり、精霊信仰の一部であった。その後、外来の宗

教に多くの影響を受けながらその性格が変化して行く

のである。今日、目にすることの出来る道祖神は実話、

性的で、いわゆる生産の神としての面が多いのであ

る。狩猟と農耕によって生活をたてていた人々は、山

の神や田の神を考え、そして信仰していたことは、し

ごく当り前とも云えよう。今、地域社会に現存する靈

神や、田に関する多くの語いや民間行事などの多くの

調査により、早川孝太郎が「さ」と称する靈神の摘出

に成功している^{注②}それによると、東北地方の福島県、

注① いわゆる自然村

注② 西岡秀雄著「日本における性神の史的研究」

潮流社 S二十五年

山形県、新潟県の山岳地帯の獵師等の間には、「さが
み」又は「さがみさま」とよばれる山の神があり、静

岡県、愛知県、長野県の山地の獵師達にも「さち」の

訛りと考えられる「しゃち」「しゃちまんじ」の神名

や「さち祭り」などの土俗語が存在することから「さ

神」とよばれる神の存在をみとめるのである。これら

が中国地方西部では、「さんばい」とか「さんばえ」

とかよばれる田の神であり、四国へ渡つては「さばい」、

九州鹿児島県では「さつどん」とよばれている。更に

田に関する各地の農村語をみても「さ神」の存在を

立証すると思われる言葉が多くあるのに気付く、例え

ば、田植の月を「さ月」といい、田植女を「さ乙女」、

初めての田植を「さおり」、田植の終りを「さなぶり」

等々、「さ」の存在をみとめる。そして道祖神の祭り

として一月に行なわれる火祭りを長野県地方では「さ

んくろう」とよび、又地方々々によつては「さいの神

祭り」「さいどやき」「さぎちよう」などといってい

る。とにかく「さ神」の存在は、山の神にも田の神に

も防塞の神にも……と、いたる所に認められる訳であ
る。

これによって道祖神、塞の神は、「さ神」としての位置付けが出来る。ところで、道祖神の歴史を紐解いてみよう。歴史上の文献などに、これらの神の名を見ることが出来るのであろうか。西暦七二〇年撰上の日本書紀には雷神を追い返す……という条に「来名戸之祖神」という文字になって表われている。又、和名抄では「佐倍之神」とし、忌部正通の神代紀口訳では「道祖神」として表われている。このころの道祖神は木の棒などに神格を与えて祀ることに初まっている。今日でも一部には木の棒の道祖神を見ることもできる。塞の神は、そんな姿、性格から、やがて「さいわいの神」として中世以後には、著しく「性神」と習合し、塞の神、道祖神は、性神の代名詞の感を呈するようになってきた。一般に、奈良時代から平安時代にかけては、大陸からさかんに文化を輸入し、大いに栄えた時代であったと云えようが、これらの時代は、いずれも仏教文化を中心としたものであり、中央的であり、貴族中心的な傾向が著しく、いわゆる民衆や地方中心ではなかったことは否めない事実ではなからうか（今日でも、そのことは、あてはまると思うが）。当時仏僧が民

衆に対し、仏教の深達な教理を説いても、仏の境地に悟り入らんとする努力は、誠に稀薄なものであつて、もつと現実的現世的な幸福を求めていたであろう。災難を除き幸福をもたらすという観音や、病気を治すという薬師如来などに強烈な信仰が集まったのである。仏教の深い教理とは裏腹に、木の棒などによって塞の神が、性神の性格を呑み込み、それが民意に極めて反映して江戸時代に入ってから一層性神化が進んでいった。元来、土地を悪霊から守る神が、旅の安全を守る神に、男女の縁結びの神に、そして、子さぶかりの神に、安産の神に、広い意味における生産農耕の神と、数々の性格を含んで現代に至っている。

今日の道祖神は、歴史の流れの内にあって、多岐多様な意味を持ち、又それぞれの地方によって、性格の強さや形態が違つていても、しごく当り前のような気がする。このことが何かしら観光ブームに乗り、随分雑誌などを賑わしている訳であるが、町村単位や、個人の調査なども盛んになり、保存の面、学術の面でも研究が進んでいることは、大変嬉しいことである。

さて今までだらだらと書いてきた訳だが、道祖神を

目で見て頂くことにしよう。道祖神は、多くの場合、村（ムラ、いわゆる自然村）に最低一体は祀られている。その姿は、写真を見て頂くが、大きく三つの種類に分けることができる。まず第一に、性神としての性格が最も強い象徴神である。これらは自然石や人工的に造られた石の男根と女陰である。写真(1)に見られるのは、自然石の男根である左手の棚のすき間から見えるのが女陰石で、これも自然石で、岩質は安山岩のようである。又、この場合として陰陽の結合石が一体祀ってある。裏面には「寛政十年（一七九八年）新井村中」と造年と祀る部落名が刻まれている。写真(2)は、「道祖神」と刻まれた文字神である。これらの裏面にも建立年と部落名が刻まれている。大きさは、だいたい一米から二米位のものが多い。第三には写真(3)にみられる絵姿神である。この絵姿神が最もポピュラーな道祖神と云ってもよい訳で、長野県大田市常盤小の牛越嘉人氏が同北安曇郡内を限なく調査された資料によっても、象徴神、文字神、絵姿神の割合は、一対、三対、六の比を示し、絵姿神の多さを示している。又、興味深いことに、地域によって、その比率は、決して

一定ではなく、閑村に入るに従って、文字神や木製の道祖神が多く見られるようになる。この現象が何を意味するものか、筆者は、つかめないでいるが、この点、単純に考えてみると、里の比較的農業も豊かな地には、絵姿神が圧倒的に多く、閑山村に入ると余り見ることができなくなる。これは、生活の豊かさが、ゆかいな絵姿神を造らせ、反面貧しさが文字神や木の道祖神を造らせたのか、などと考えて見るが、今後の問題を残す大切な点である。全体的に見て、絵姿神の数多さから道祖神といえば男女の姿を刻んだものを考えがちではあるが、いま述べたように、ほんの一郡の内でも形態の違いが見られることは、人々の信仰の幅広さ……とでも云えようか、民間信仰なら、わだ、と、思う次第である。勿論、ただ絵姿神といっても細かく分類すれば、服装や頭の形なども皆違っている。多くは男神女神とも正面向きで、すました顔をしているが、ほおをすり寄せているもの口付けをしているもの微笑んでいるものなどがある。服装は大きく分けて、仏衣、神祇服、平常着となる。前述牛越氏によれば、仏衣の神は、比較的時代の古いものに多く、神祇服の神が新

しいようである。神祇服姿のものには鳥帽子エボシをかぶったものもある。男神女神とも平常着姿のものは、ドテラや短かい裾から膝を出しているものすらある。絵姿



写真 (1)

神には何かしら手に物を持っているが、酒器、扇、まゆ玉、蓮の花等々、酒器を持つ場合は、男神が盃、女神が徳利、あるいはこの逆。蓮の花などを持つものは、



写真 (2)



写真 (3)

氏の図によると、いわゆる道祖神とよばれる絵姿、文字神、陰陽石などの存在配置を明らかにしてくれる。

図 (1)。

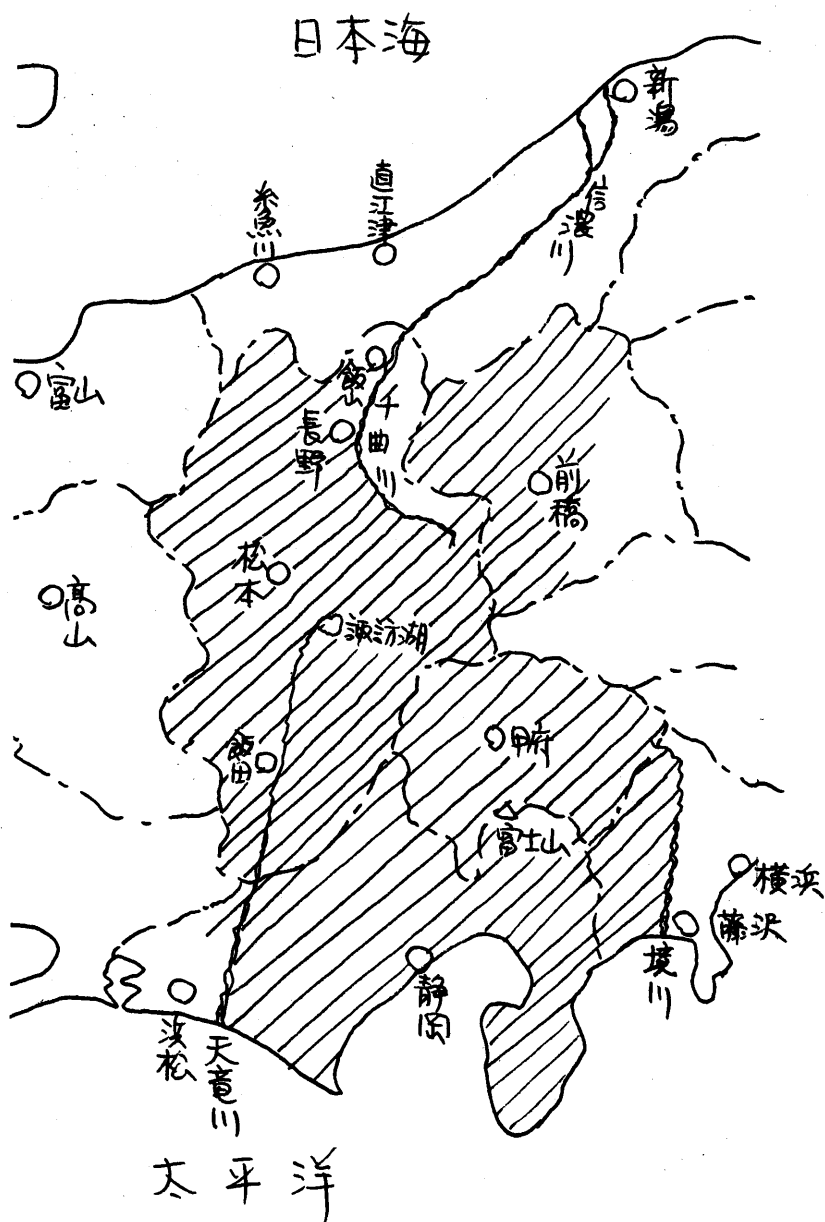
実に興味深い分布図を示す。最も濃厚に分布する長野県地方を中心として群馬、神奈川、山梨、静岡県に広がっているが、新潟県、岐阜県には全くと云ってよい程見ることが出来ない。又、大きな山岳や川を境にしていることも見逃がせない。同じ長野県内でも千曲川東岸には余り見られないというし、静岡県の天竜川の西岸にも、又境川東岸にも見られなくなる。これだけの限られた地域内だけで祀られる神に対して、深い何か不思議な心が出来上がってしまう。

やはり比較的古い時代と考えられ、仏教の影響を如実に示している。これは髪形や男神のかぶる帽子にも現われている。前期のものは、僧侶のかぶるもので、後のものは神官のかぶるものであり、又それに伴って頭髮もお地藏さん形から神官形へと変化してきたようである。大まかに云えることは、およそ西暦千七百年代中期が、これらの変換期と認められる。

「道祖神」は、今日までの調査によって、分布図を作るのに成功している。川口謙二氏によるそれである。

南安曇郡の酒井幸男氏の調査によると南安曇郡内で二百二十二基の道祖神があるという。牛越氏の北安曇郡調査をも含めると、五百基の数になる。これらの神は、特に「愛の神、縁結びの神としての性格が強く、兄妹が相愛してしまい、それを恥じて旅立ったのを哀れみ刻んだ……とか、かけ落ちの若い二人が行き倒れ

注③ 川口謙二著「路傍の神様」東京美術S四十三年



(図 1)

になった場所に悲恋にあやかつて立てた……とか、男女の仲の良いのを見せつけると悪霊が退散してしまふとか色々の話が伝えられている。こんな思想が地理的条件とからみ合つて、東を目指して行つたのか？、この点も第二の問題点である。しかし、これも一部分の研究者が言つておられる安曇地方故郷説によるところであつて、全く別の考えも有つて然りである。

次は、道祖神にまつわる行事や風習などについて書き進めよう。

道祖神を祭る行事として先ずあげられるのが三九郎である。場所によつては、どんど焼、おんべ焼、さぎちよう、などとよばれ、子供中心の年中行事の一つになっている。正月に各家々でたてた松飾りや藁などを集めて、御幣をつけた柱の回りに積み上げて焼く。この火で焼いた餅を食べると風邪をひかないと云われ、又、正月の書きぞめを焼くと文字が上手になり勉強が出来るようになるという。昔は、これらの行事も盛大に行なわれていたが最近では、門松を飾る家が少なくなつたり、それに替わつて紙に印刷したものを使用したりで淋しい祭りに変りつつあるが、都市部を出て郡

部へ行けば、まだまだなかなかのものである。この燃え上がる炎を囲み子供達は、

へさんくろう、さんくろう

かかあのべつちようなんちようだ、

まわりまわりに毛がはえて

中にちよつとちほくんで

柿の種くわえて、

と、はやしたてるが、子供達にはひ狼だということと

へさんくろ、さんくろう　しくろでござる

だんご焼きに出ておくれ

じいさん、ばあさん出ておくれ、

わあい　わいわい、

と変化させてしまつてゐるようである。この三九郎焼の時期は、たいてい一月中には終るが、三日、四日、七日、十四日、十五日、十六日と、まちまちであるが、今日では十四日が休日の前日と云うことで最も多いようである。

「道祖神さんの祭」と一般に云われる行事が例年各地で行なわれている。一年中、大なり小なり何らかの形で地区ごとに行なわれる。南安曇郡穂高町青木花見

部落においては、八月下旬とされていた。この祭りでも、やはり子供達中心で「道祖神仲間」とよばれるグループを作り、自分達の村の家々を廻って寄付を集め、駄菓子などを買い、道祖神の近くに小さな小屋を造り、夜には灯りをつけて、道祖神に御神酒をあげ、自分達は砂糖湯を呑みながら楽しんだ。大人達は、この夜「祭文よみ」注④を当番の家や公民館などに招き、祭文を聞き酒を呑み過ぎたというが、最近では殆んど見られないようである。穂高町付近では、この祭りの時等に神に色彩をほどこすこともある。又、月々一回位、当番制で色付けをする地区があり、その後を集まって祝の席で一杯やるそうである。京都のお地藏様に化粧をするのとケースが似ているようである。道祖神を盗むという興味深い風習もあった。村の若者達が他の村の道祖神を自分の村へ夜中に持ち帰ってしまったのである。そのかわりに、盗んだ村へは酒を一斗置いてくるというのである。このことを盗まれた村の人々は、

注④ かけおち、心中物などを調子をつけて語るもので今日の浪花節的なものを語る人

「道祖神さんが嫁に行った」といい、盗んで行くのを見つけても、村境を越えてしまうと後を追うことをしなかつたのである。又、気をきかせた道祖神になると、神の裏側に「帯代〇〇〇」と値を付けたものがあり、その帯代どうりの金額を置いていけば、持ち去つてもよかつたという。ここで帯代というのは、いわゆる「結納金」の意味であり、盗む、というのは、「略奪結婚」とでもいうことであろう。又、道祖神に願いごとをしようとするときに、道祖神を荒縄で絞り、泥をぬりつけて「道祖神いじめ」といわれることが行なわれていた。道祖神をいじめて、自分の願いを強制的に聞き入れさせようとするもので、実に人の肌に密着した神さまで、心から楽しくなる。この願いが適った時は、又、きれいに化粧をしてもらったことであろう。さて、とりとめもなく道祖神について書いて来たが、「どうぞじん」とは、このようなものか……と、わかり頂けたらと思ひ筆を走らせた次第である。今日、民間信仰云々の中で、これらの素朴な神も、本来の姿を失いつつある。つまり観光の一部分化なりつつあるし、信仰層が急激に薄くなつて来ている。このことは、

多くの人が調べれば調べるほど、「だった」とか「行なわれていた」と、過去形で表わされている全てにぶつかるのである。何とも言いがたい心境になってしまっているのである。

おしまいに、社会学研究会の古宮君から原稿を依頼されてから、早半年も過ぎてしまい、筆を執ってから三ヶ月を過ぎてしまいう訳で、冬の景色から春、そして初夏へと信州も四季の流れの中で、美しい若葉の頃になってしまいました。研究会の皆様には大変申し訳なく思います。あの若葉の木蔭に、たたずむ道祖神の姿を思い起こしながら筆を置かせて頂きます。会の発展を御祈り申し上げます。

(会社員 学部四十九年卒)

参考文献

- 川口謙二、『路傍の神様』 東京美術、昭和四十三年、
- 桜井徳太郎、『民間信仰』 塙書房、昭和四十七年、
- 牛越嘉人、『北安曇の道祖神』 昭和四十八年、柳沢書苑、
- 西岡秀雄、『日本における性神の史的研究』 潮流社、昭和二十五年、

昭和五十一年四月